

学生参加型秋田市外旭川地区まちづくりワークショップ開催の効果

益 満 環

The Effects of Organizing a Student-Engaged Community Development Workshop in Sotoasahikawa Area of Akita City

MASUMITSU, Tamaki

Abstract

Akita Prefecture has the most rapidly depopulating and aging population with fewer children than any other prefecture in Japan. In this environment, there is a strong need to make the best use of local resources and maintain a vibrant city while responding to social changes. This study describes the effects of a student-participatory workshop on community development in the Sotoasahikawa area of Akita City, organized by the City development Strategy Section of the Akita City.

キーワード：まちづくり，地域活性化，ワークショップ，秋田市

Key Words: Community Development, Regional Revitalization, Workshop, Akita City

1. はじめに

過疎化および少子高齢化が著しい秋田県において、地域資源を最大限に活用し、社会の変化に対応しながら活力ある街を維持していくことが強く求められている。そうした中、秋田県内で若者のアイデアをまちづくりに活かそうとする動きが活発化している [2]。秋田市においても秋田市企画財政部まちづくり戦略室が将来を担う若者の意見や柔軟な発想によるアイデアをまちづくりに活かそうと大学生、高専生を対象に「未来が見えるまちづくり」をテーマにワークショップを開催した。ワークショップの目的は、地域が存続するために市内の学生が積極的に市政やまちづくりに関わることの重要性を知り、且つ学生の持つ知識や情報、発想の柔軟性や創造力を生かして、新たなまちづくりのアイデアを提案することである。以下、本研究では、秋田市企画財政部まちづくり戦略室が開催した学生参加型秋田市外旭川地区まちづくりワークショップ開催の効果について述べる。

2. 学生参加型秋田市外旭川地区まちづくりワークショップの開催

2.1 秋田市外旭川地区まちづくり基本構想

外旭川地区まちづくりは、民間事業者の知見やノウハウを活用し、将来のまちづくりを見据えた官民連携によるモデル地区を整備するものであり、次の2つの目的の実現を目指している。

①人口減少下にあっても持続可能な社会基盤の構築

AIやICTなどの技術を活用した先端的サービスの導入により、秋田市が抱える課題の解決を他の地域に先駆けて行い、実証的な取組で得られた成果を全市域に波及させるモデル地区を整備することで、人口減少下にあっても持続可能な社会基盤を構築すること。

②交流人口の拡大による新しい活力や魅力づくり

豊かな自然や旬の食べ物をはじめとした四季を感じる日々の営みを市民や秋田市を訪れる人が実感できるよう、交流人口の拡大につながるにぎわい創出の取組と、そのために必要な施設と機能を整備することで、若者が将来に希望を持ち、「これからをこのまちで暮らしていきたい」と感じられるような新しい活力や魅力を創出すること。

また、この基本構想は、上記2つの目的を実現するため、①AI・ICTの活用、②起業支援、③ゼロカーボン、④広域防災拠点、⑤次世代医療、⑥交流人口拡大、⑦次世代型農業の7つの取組に注力するとしている。さらに秋田市が行う卸売市場再整備、官民連携で行う新スタジアム整備および民間施設の整備を一体的に行い、この7つの取組を連携させながら実施することで、秋田市が抱える課題の解決を図り、得られた成果を広く他の地域へ波及させていくとしている [1]。

2.2 外旭川地区まちづくりワークショップの概要

上述したとおり、秋田市では人口減少・少子高齢化の

進行に伴う様々な課題を解決するため、外旭川地区で官民連携による新たなまちづくりのモデル地区整備を検討中である。そこでモデル地区での取組に、将来を担う若者の意見や柔軟な発想によるアイデアを反映するため、大学生・高専生を対象としたワークショップを開催した。主催は秋田市企画財政部まちづくり戦略室で、ワークショップには秋田県内の大学生および高等専門学校生計21名が参加した。「これからをこのまちで暮らしていきたい」と希望を抱ける秋田市の姿について、「はたらく（雇用など）」、「くらす（生活インフラなど）」、「たのしむ（娯楽など）」の3つのテーマに分かれて意見交換を行った。各グループには1名のファシリテーターが付き、筆者もファシリテーターとして参加した。ワークショップの開催により、学生の交流の場づくりによる地域活性化の客観的な気づきの機会を創出するとともに、ファシリテーターや秋田市職員および学生が有する知見や経験の活用も視野に入れた。さらに、学生がまちづくりを考える機会創出の一助とし、若年層のシビックプライドの醸成を図ることも念頭に入れた。以下にワークショップの概要について記す。

- (1) 日時：令和5年7月8日（土）
午後1時30分から午後4時まで
- (2) 場所：秋田市役所中央市民サービスセンター
- (3) 参加者数：21名
- (4) ファシリテーター：
（株）141 & Co. 代表取締役 石井 宏典
（「はたらく」グループ担当）
秋田ファシリテーション事務所 平元 美沙緒
（「くらす」グループ担当）
秋田大学教育文化学部准教授 益満 環
（「たのしむ」グループ担当）
- (5) 内容：ワークショップの趣旨説明、グループワーク、アイデア発表会
- (6) 実施目的：
 - ・第7次秋田市総合都市計画の策定にあたり、各地域の市民と都市計画に関する基本的な知識や本市が目指す将来都市像の方向性を共有し、地域の現状・課題、住民の意向等を踏まえた今後のまちづくりについて検討する。
 - ・ワークショップでとりまとめた検討内容は、主に次期総合都市計画における「地域別構想」や「実現化方策」等に反映する。
 - ・参加者が、ワークショップでの議論を通じて、市民・地域が担う役割や、取り組むべき課題等を認識することにより、まちづくり活動への関心・意識の高揚を図る。

ワークショップの進め方については、上記（5）の内容のとおり、今回のワークショップの趣旨説明を行い、本ワークショップの目的が地域の魅力と課題の発見と共有、若年層のシビックプライドの醸成、地域活性化のためのアイデアの提案である旨の説明を行った。参加申込者には、事前に外旭川地区のまちづくりについて説明した動画を視聴していただき、「はたらく」、「くらす」、「たのしむ」の中から参加したいテーマを選択してもらった。また、以下について検討の上、ワークショップに参加してもらった。

①「これからをこのまちで暮らしていきたい」と希望を抱ける秋田市になるために、自分が参加するテーマの視点から、そのアイデアを少なくとも1つ考えてくる。

②上記のアイデアを考えた際の根拠となった理由やデータを調べてくる。

グループワークは、それぞれのファシリテーターが進行した。参加者は初対面同士であったが、活発な意見交換が行われていた。出されたアイデアは付箋に記入し、模造紙に張り付けて、情報共有した。アイデア出しに際して、若者ならではの自由な発想や創造力を生かし、秋田市の未来を切り拓く「尖ったアイデア」を創造するよ



図1 グループワークの様子



図2 ブレインストーミングによるアイデア出し

う求めた。また、アイデアの提案にあたっては、問題点の把握や解決策の提案内容は、収集したデータ等の分析結果に基づく内容とするようお願いした。図1は学生がグループワークで意見を交わす様子である。また、図2はブレインストーミングによって抽出したアイデアを学生が付箋に書き止め、模造紙に貼る様子である。

ブレインストーミングによるアイデア出しの後、発表会に向けた最終調整を行った。最後に、若者が秋田市のまちづくりや地域社会の持続・発展に向けたアイデアを発表した。図3および図4は発表会の様子である。



図3 発表会の様子①



図4 発表会の様子②

各グループによる提案内容は以下のとおりである。

(1)「はたらく」グループ

- ア はたらく
 - ・若者が集まるような、魅力的な企業（大手企業・賃金の高い企業）を誘致
 - ・自分の求める働き方と、企業が考える働き方をマッチングできる施設を設置
- イ プライベート（頑張っているためには、プライベートの充実が必要）

- ・野球やコンサートなどができる全天候型のイベント施設を設置
- ・ハードだけではなく、出会いや交流イベントなどを実施（気軽に話せるコミュニティをイベントとして設計）
- ウ 交通（職場やプライベートを楽しむ場までストレスフリーで行けることが必要）
- ・自動運転を導入して人件費の削減と運転手不足に対応するとともに、ビッグデータを活用して効率化を図り、路線バスを増便

(2)「くらす」グループ

- ア 移動（行きやすい・集まりやすいまちになるためには、移動手段が必要）
 - ・雪など、天候に左右されない交通手段である地下鉄を整備
 - ・LRT（Light Rail Transit: 次世代型路面電車システム）の導入
 - ・公共交通を補うものとして、AIを活用した乗り合いタクシー、シェアサイクル、カーシェアリングを促進
 - ・歩行者の歩きやすさや渋滞緩和を考慮した道路整備
- イ 環境（エリア内全体で、環境に良い取組を実施）
 - ・エコバッグの配布
 - ・エリア内の建物はネット・ゼロ・エネルギーとし、その建物に多目的な休憩所や交流スペースを設けて活用（防災や移動ツールの拠点、子育てスペース、AI・ICTリテラシー向上に向けた学習の場、コワーキングスペース）

ウ 医療

- ・AI・ICTを活用した介護サービス

エ 安全（エリア以外の「まち」にも目を向ける）

- ・空き家を人が集まることのできる施設として活用

オ 交流

- ・エリアの取組を継続的にフィードバックできる仕組みづくり

(3)「たのしむ」グループ

- ア まるごとアート外旭川（エリアに行くまでの道のりにアート作品を設置）
 - ・目的に到着するまでも楽しめ、まちも明るく
 - ・歩くことで健康増進
 - ・中心市街地のクラシカルな芸術作品に対し、外旭川には若い芸術家の作品や現代アートを設置
- イ USA（ユニバーサル・スタジオ・アキタ）
 - ・大型交流・宿泊施設の設置
 - ・夜遅くまで利用できる飲食店、スポーツカフェ

- ・eスポーツなど、観たり体験できる施設で交流人口を拡大
- ・収穫体験ができ、収穫したものを調理してもらえる飲食店を設置（次世代農業とのリンク）
- ・様々な施設を1か所にまとめることで、まとまった雇用を創出

今回のワークショップで出された意見・アイデアについては、可能な範囲で外旭川まちづくり基本計画に盛り込むとともに、次年度以降、民間事業者が作成する地域経済牽引事業計画の参考としていくとのことであった。

3. ワークショップ後のアンケート調査

ワークショップ開催の効果を測定するため、ワークショップに参加した学生に対し、アンケート調査を実施した。その結果を以下に示す。

問1 ワークショップに参加した理由は何ですか？（複数回答）

ワークショップへの参加理由を聞いたところ、図5に示す結果となった。最多は「自分の良い経験になると思ったから」と「まちづくりに関心があるから」が同数で7件であった。次に「学校から紹介されたから」で5件、「まちを知るきっかけになると思ったから」が3件、「その他」1件と続いた。

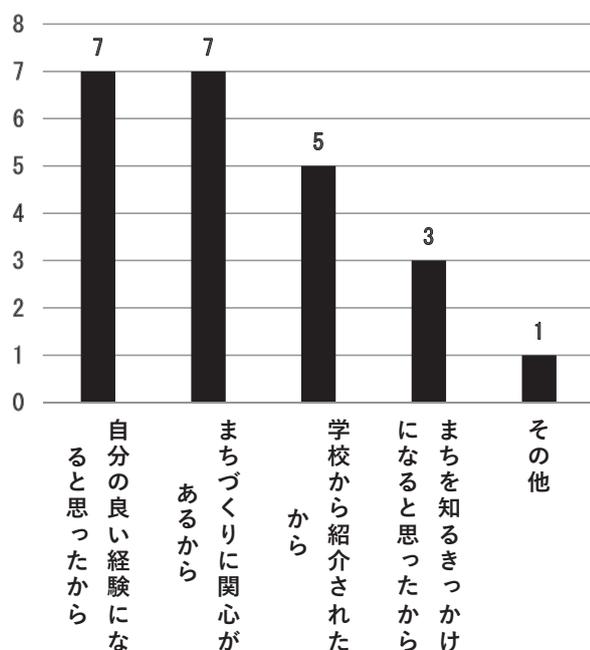


図5 参加理由

問2 本ワークショップの主旨を動画にして事前に視聴頂きましたが、内容は理解できましたか？（択一回答）

秋田市まちづくりにおける主旨およびワークショップ開催の経緯について参加者へ事前に約6分の動画を配信し、説明した。動画の内容について感想を聞いたところ、図6に示す結果となった。最多は「とても分かりやすかった」、「分かりやすかった」が同数で10件（48%）であった。次に「分かりにくかった」が1件（4%）、「全くわからなかった」が0件と続いた。

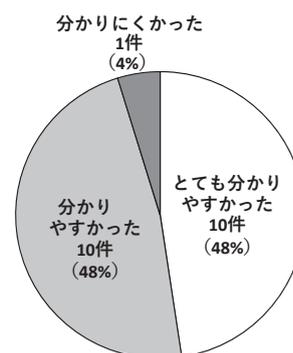


図6 動画内容の満足度

問3 ワークショップの内容・進め方はいかがでしたか？（択一回答）

ワークショップの内容・進め方について感想を聞いたところ、図7の結果となった。最多は「とても良かった」で16件（76%）であった。次に「良かった」で4件（19%）、「無回答」が1件（5%）と続いた。

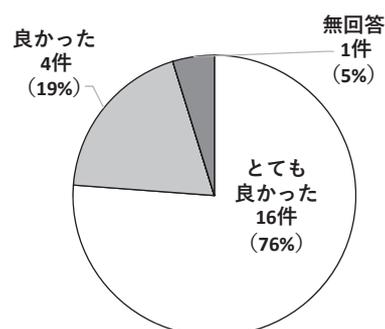


図7 ワークショップの内容・進め方の満足度

問4 「外旭川地区」のまちづくりについて、参加前どの程度知っていましたか？（択一回答）

「外旭川地区」のまちづくりの認知度について聞いたところ、図8に示すとおり、最多は「少し知っていた」の7件（33%）だが、「あまり知らなかった」が5件（24%）、次いで「全く知らなかった」が6件（29%）、無回答は1件（5%）であり、認知度は総じて低かった。

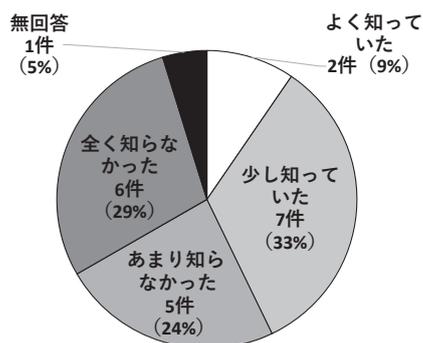


図8 「外旭川地区」まちづくりの認知度

問5 「外旭川地区」のまちづくりについて、関心は高まりましたか？（択一回答）

「外旭川地区」のまちづくりについて、ワークショップを経て関心が高まったか聞いたところ、図9に示すとおり、「とても高まった」が最多の15件（71%）、次いで「少し高まった」の5件（24%）と続いた。無回答は1件（5%）で、「あまり高まらなかった」および「全く高まらなかった」はともに0件であった。

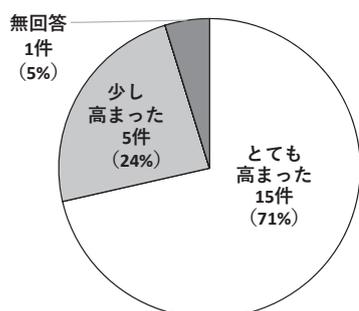


図9 まちづくりへの関心度

問6 今回のワークショップ・発表会を通じて、感想や意見について自由にご記入ください。

ワークショップに参加した学生から以下のような建設的な感想や意見が出された。主要なものを以下に示す。

- ・当地区にずっと住んでいるので、関心がより高まった。またこのような企画があったら積極的に参加したい。
- ・「若者の意見を取り入れる」を実際にやろうとしている市の姿勢が感じられた。
- ・外旭川地区周辺に住んでいるため、元々関心があったが、何が課題で何が求められているかを皆の意見を聞きながら深めることができた。
- ・新しい交流ができて良かった。まちづくりについて考えるのもおもしろかった。
- ・外旭川地区だけでなく、秋田市のほかの地区に関するワークショップも開催してほしい。

4. 考察

学生に対するワークショップ後のアンケート調査結果から、「秋田市の課題や魅力が明確になった」、「まちづくりに対するモチベーションがあがった」、「秋田市をもっといい街にしたい」といった意見が多く、地元の魅力に気づき、まちづくりを自分事として捉えることができたこと、さらには地元の課題やニーズに対して理解を深め、その解決に寄与する姿勢が育まれたことは大変喜ばしいことであった。また、学生同士によるグループワークによる協働作業が「とても良かった」との意見や「学生との交流を増やしてほしい」といった要望もみられ、異なるバックグラウンドや専門知識を持つ仲間と協力する経験が得られたことは学生にとって大変貴重な機会であったことがうかがえた。

5. おわりに

若者の意見やアイデアを秋田市外旭川地区のまちづくりに活かすことを目的に秋田市内の各種学校に通う学生参加型のワークショップを開催した結果、3つのグループから若者の視点でまちづくりのアイデアが提示された。また、学生の地域に対する愛着や誇りがより一層醸成されたと感じた。さらに、次世代を担う多くの若者が、市政への関心や地域社会への愛着、まちづくりへの興味を持つようになることで、将来のまちづくりを支える担い手の育成につながることも実感できた。

今回のような秋田市内においてワークショップ形式で学生が多数参加し、真剣に地域の将来について意見を交わす場はこれまでほとんどなかった。秋田の将来を担う若者が持続可能なまちづくりに関する有用な学びを得るためにも、今回のようなワークショップを継続的に開催して頂きたい。

参考文献

- [1] 秋田市企画財政部まちづくり戦略室「秋田市外旭川地区まちづくり基本構想」, 2023年3月。
- [2] 益満環「高大官連携による地域活性化ワークショップ開催の効果」, 秋田大学教育文化学部研究紀要, 第78巻, 2023年3月, pp.1-6。

謝辞

秋田市企画財政部まちづくり戦略室室長の多可和幸氏および副参事の佐藤史子氏はじめ、同室の職員の皆様にはワークショップが円滑に実施できるよう多大なご支援・ご協力を頂戴致しました。心より深く感謝申し上げます。

